

シンポジウム

柳田国男・関敬吾とそれ以後

——口承文芸研究の流れ——

一九九六年六月二日、国学院大学たまプラーザキャンパスにおいて日本口承文芸学会第二十回大会のシンポジウムが福田晃・三原幸久両氏の司会により行われました。以下は各パネリストが大
会后、報告を基にまとめたものです。

はじめに

福田 晃

日本口承文芸学会二十周年記念大会のメインのシンポジウムは、『柳田国男・関敬吾とそれ以後——口承文芸研究の流れ——』と決せられ、四人の講師の提言によって開催されることとなった。運営委員会のご意志で、小生に司会をせよとのこと、大会に先立ち三月の例会後に打ち合わせがおこなわれた。「口承文芸」とうたう以上、散文伝承のみならず、韻文伝承にも及ぶべきものと思われたが、企画の中心にあられた石井正己氏のご説明によると、他にも企画があるということであった。聞くとところによると、本誌のために、

座談会（口承文芸の研究と未来）が催された由であるので、おそらくそれに期待できるのであろう。ともあれ口承文芸の研究は、昔話や民間話の枠に封じ込めるものではなく、民謡・童謡、唱え言・童詞、など・ことわざなどのジャンルにまで視界をもつべきもので、その点は当学会の今後に期するところである。

さて、当学会は、会誌『口承文芸研究』創刊号に、白田甚五郎氏が「日本口承文芸学会の創立」と題して詳述されたごとく、世界に開かれた口承文芸研究を目ざして発足したものであった。たしかに

従来の研究は、柳田国男の提唱にもとづく、日本民俗学の範囲のなかで、研究を進めることが主流であった。その柳田に従い、これを越えて研究を学際的に押し上げた関敬吾博士を代表として学会が発足したことは、やはり大いなる意義があったと言える。しかもかつて柳田国男が豊かな伝承を誇示した、わが国の口承文芸も、ようやく伝承の枯渇を迎えつつあった。その研究の視界を世界に広げることは、研究史的にも当然の方向性であったのである。

ところで、口承文芸が民間伝承に属することは諸民族に共通するものと言えよう。そしてその民間伝承が、現代社会のなかで、大小の差はあれ、あるいは大きく変貌し、あるいは衰亡に向かいつつあることは否定できないであろう。その大きなうねりが、わが日本に押し寄せてきたことも、今日、確実となった。したがって、日本の口承文芸を研究の対象とする者にとって、それは一つの転機を要請されるものであり、やがてそれは豊かな伝承を誇る中国や東南アジア、あるいはアフリカの諸民族にも及ぶことであれば、事態は五十歩・百歩だと言えよう。

当シンポジウムは、そのような事態のなかで、われわれ口承文芸の研究者は、何をなすべきかを考えるために開催されたものと判じられる。その意味で、四氏の提言は、それぞれに意義あることである。勿論、その切口は、これに限るものではない。それぞれの一例として耳を傾けていただきたい。

ただシンポジウムとして残念であったのは、参会された会員からの発言を全く得られなかったことである。これは司会のわたくしの

責任であるが、余裕ある時間の配分を用意されることを今後の運営委員会に望みたい。

(ふくだあきら／立命館大学)